

LE T 関東支部だより

第40号

2007年10月発行

外国語教育メディア学会

.....

英語教育への提言

英語 60 点以下はなぜ不合格？

大友 賢二（筑波大学名誉教授）

「目標に準拠した評価」「Can-Do statement」「CEFR」「全国学力調査」などが議論されている中で、60点以下では「不合格です」とか「卒業はできません」とかいうことを耳にします。この60点以下というのはどういうことを意味しているのでしょうか？そのテストの難易度は、どうだったのでしょうか？非常に難しかったのであれば、60点はすごく優秀な受験者を意味することになります。非常に易しかったのなら、あまり優秀でないことを意味することになります。このように、素点には、きわめて不明な要素が含まれています。さらには、テストが難しいので60点なのか、それとも、受験者の能力が低いので、60点なのか分かりません。つまり、素点は、テスト項目の難易度と受験者の能力を明確に分けて示すことはできないという問題を抱えているのです。

こうした問題の解決法のひとつは、テストや受験者に依存しない得点の示し方を工夫することです。T-score、つまり偏差値、を使えば、一見公平な結果が得られるような気がします。平均値と標準偏差を共通にすることができるからです。しかし、これも、基本的にはテストと受験者集団に依存しているので、共通の尺度とは言えません。共通の尺度の設定は、たとえば「項目応答理論」による「等化」と呼ばれる方法、などを活用して行うことが必要です。どのようなテストでも、どのような受験者集団でも、共通の尺度を設定することによって、はじめて、この課題は解決されます。TOEFLもTOEICも、いつ、誰が、どのテストを受験しても、不公平がないように、共通の尺度を設定したテスト問題を準備して実施されています。

かりに、共通の尺度が設定できるテストが準備できたとしても、しかし、なお残っている課題があります。それは、「なぜ60点が合否判定の基準か？」ということです。これは、大きな課題です。合否判定をする場合には、「目標の設定」を明確に定めておくことがぜひ必要です。しかも、最も重要なことは、どのようにして合否の「分割点・基準の設定」(standard setting)を行うかです。60点以下はなぜ不合格となり、そして、それはどんな方法で決定されるのがよいのかということです。「十分満足」、「おおむね満足」、「努力を要す」の設定は、たとえば、素点の100-90、89-60、59-0とする、という見方は、ほんとうに正しいのでしょうか？そして分割点はなぜ60点であるか、を適切に説明できる方法がいま求められています。たとえば、いま注目されている方法のひとつには、項目応答理論を基盤とし、分割点判定者が「テスト項目冊子」のここが分割点ですと「しおり」をおくことでそれを定めようとする「しおり推定法」Bookmark Method (Mitzel, et al (2001)) などがあります。

このように、「目標に準拠した評価」をこれからも生き残れる評価とするためには、この「分割点・基準の設定」は、きわめて重要な課題となります。

LET 関東支部第 118 回研究大会を終えて

吉成 雄一郎 (東京電機大学)

去る 2007 年 6 月 16 日(土)神奈川県文教大学湘南キャンパスにおいて LET 関東支部第 118 回研究大会が開催された。本大会のテーマは「デジタル時代の教材開発を考える」であった。とても澄んだ空と空気、遠くには富士山が美しく映える中、湘南キャンパスには多数の会員が集まった。

午前中は 3 つのワークショップが開かれた。跡部智先生、高田哲雄先生、國枝孝弘先生がそれぞれに、大会テーマにふさわしく、デジタルメディアの活用や加工の方法について、実践的な内容のワークショップを披露した。今話題の Podcasting には特に参加者の関心が大きかったようである。

午後には、実践報告の発表と、初めての試みであるラウンドテーブルが行われた。実践発表は 3 つの教室に分かれて、計 6 本の発表があり、どの会場も活発な質疑応答が行われた。ラウンドテーブルは、「CMS の活用を考える」というテーマで、前半は Moodle を中心に原島秀人先生が、後半は Xoops を中心に淡路佳昌先生がコーディネータとなり行われた。設定した時間(30 分×2)では議論が集結しないほど、中身の濃いものであった。

午後の最初のプログラムは会場校挨拶から始まった。最初に会場校の文教大学の拝仙マイケル学長よりご挨拶をいただいた。続いて見上晃 LET 関東支部長からも挨拶があり、会場校への謝辞と大会のテーマの意義などが述べられた。

その後、John F. Fanselow 先生(コロンビア大学名誉教授・インターナショナル・パシフィック・カレッジ学長)による特別講演があった。テーマは、"Mastering English through Digital Thinking"で、ワークショップに近い形で行われた。"digital thinking"とは"teaching"や"memorization"とは対極的なもので、言葉の獲得は自分の知識や経験を総動員して行われるプロセスだと説かれた。Fanselow 先生は、いきなり黙って黒板に「穴」だらけの自己紹介文を書き始めた。クイズのような英文を我々に読ませようとしたのである。少しずつ会場の参加者から「穴」に入るべき答えが出され、やがて英文は完成した。このパズルを通じて Fanselow 先生は、断片的な情報をさまざまな背景知識使って統合し、全体像を推測するというのを、楽しいパズルを使って我々に示してくれた。"Huh?"(何だろう?)から"Ah!"(あや!)へ、そして"Aha!"(そうか!)という理解のプロセスが「教える」とか「記憶する」ということよりも active で楽しく、またなによりも言語の習得につながるということを示した。

大会最後の締めくくりとして、懇親会が食堂 2 階で行われた。おそらく参加した人々を最も感動させ、心を和ませたのは、文教大学の学生によるアカペラだろう。学生たちが私たちを精一杯もてなそうとしてくれる姿は、この大学の学生と教員、職員の暖かい関係を感じさせずにはいられなかった。アットホームで血の通った教育を展開している様子を垣間見させていただいたひとときであった。

最後に、本研究大会の成功は文教大学の拝仙マイケル学長以下、多くの教員、職員の皆様のお力がなければなしえなかったことを記しておきたい。さらにアカペラを披露してくれた学生や陰で一生懸命に働いてくれた学生の皆さんにも心から感謝したい。

LET関東支部第118回研究大会に参加して

佐藤 仁（元東京都練馬区立大泉第二中学校）

1. 初めに

今までの人生を振り返ってみて、最も充実して取り組んだのはLLAだと思う。そこで、後身のLETの研究大会に出席し、実践報告もしようという気になった。

2. 研究会当日まで

3月23日に発表申し込み用紙に記入したが、簡単に送信できなかった。氏名、住所、発表概要等を記入し終えて、SUBMITをクリックしたが上手く行かず、事務局長の下山先生とも連絡し、27日の昼頃やっと成功した。もっと、簡便にできると良いと願った。

標題については、4月17日に跡部先生の助言で「わがHP10年間の歩み」は副題にし、翌日話し合いで「わが...」を取るようになった。

使用予定機器については、担当の宮坂先生に大分お世話になった。それまでに使っていたXP搭載のパソコンの調子が悪くなり、VISTA搭載のPCを買ったが慣れないので、どんな機器を使うかの質問に答えたのが、思うように伝わらなかった。

3. 研究会当日(その1)

余り出歩かないせいもあり、茅ヶ崎にある湘南キャンパスは大分遠い存在だった。

それ故、現地校の下見にも行かなかったが、私が初めて担当した教え子が当地に住んでおり、車で奥さんと迎えに来てくれ助かった。

キャンパスは緑一杯で、騒音、空気の汚れなく、教育上恵まれた所にあった。受付を済ませ、食堂で昔馴染みの仲間と昼食をとった。

13:20～13:50まで、「発信型の英語教育を求めて」と題し、実践報告。

OHCを使うように申し込んだがOHPしかなく、若干躊躇ったがLETと関係のある「HP10年の歩み」の副題を生かし、無事に所定の発表を終えた。



発表風景



懇親会の楽しい集い

4. 研究会当日(その2)

研究会に参加するのは、もちろん研究に役立つ発表を聞いたり資料を貰ったりするのだが、懇親会に出て古き良き友達と会い語り合える喜びは至福の感がある。

今回も多くの先輩、親友に会えた。お子さんが同じ学者になられた國吉先生、いつも会に潤いを与える大八木先生、研究が恋人の南先生、「子連れ留学」で有名な野沢先生...どこを向いても懐かしい顔があった。

私のメディア活用授業実践

教育実習ガイダンスにおける Moodle の活用

飯野 厚 （清泉女学院短期大学国際コミュニケーション科）

私の勤務する短期大学では英語教職課程を提供している。2年になると中学校の1学期または2学期早々に実習に赴く。これに備えて、1年次前期の教育実習ガイダンス、後期の同ガイダンス、2年前期のガイダンスと、3セメスターにわたって念入りにガイダンスを入れてある。しかし、実際に私が学生に向けて心得やノウハウを伝授できる時間はかなり限られている。今年から、1年前期の教育実習ガイダンスを実習直前のガイダンスと同時展開し、異学年混成として情報の共有を図った。1年生は先輩から心得を口コミで聞くことができる。2年生は実習直前の模擬授業練習をあらたな「生徒」役を加えて緊張感を持って行える。また、生徒役の1年生は自分たちが2年生になった時に行う実習直前の準備を垣間見ることができる。

このような流れの中、現在1年生が後期に受講している教育実習ガイダンスにおいて、学習マネジメントシステム(LMS) Moodle の活用を試みている。昨年度までは英語コース必修科目「CALL」において試験的に利用していた。その結果、Moodle の情報提供・情報共有のしやすさは英語に特化したものではないと判断し、学科のFDを兼ねて学内共同研究として採用してもらい、学科全科目における利用を開始したところである。

それでも教育実習ガイダンスの授業では、まずは、英語学習に利用させている。教職履修生は学内スピーチコンテストへの参加が義務づけられているため、授業時間外において Moodle を活用して準備をもらっている。暗唱部門の参加者にはネイティブスピーカーのモデルスピーチ映像とテキストの提供を行い、自分で何度も聞いたり見たりして、シャドーイングしたりするよう促している。また、speech参加者には音声合成エンジンの活用とネイティブスピーカーによる対人指導の併用を行っている。

このような語学面での活用に加え、指導案の作成練習においても活用している。課題レッスン本文の提供、指導案フォーマットの提供、指導案サンプルの提供を通して、作成を自学自習ベースで何度も行わせる。本年度はこれに過去の実習生の研究授業の録画VTRをアップロードし、それを何度も見て手順を記録するという課題を計画中である。VTRの容量が大変重くなる。10分程度のVTRでも容量(200MB以内)に応じた仕様に変換して活用する。Moodleの最大アップロード容量を大きめにしておくことが前提となる。

私は、教育実習の研究授業は可能な限り現地に赴いて録画することにしている。翌年の実習生に見せて、授業をイメージしながら準備を進めることと実習生も振り返りができる。

しかし、10名以上の実習生のVTRを授業で見せることは不可能である。そこで、Moodleを使って授業時間外に授業を見る経験を積ませたい。見ながら指導の手順を記録させる。指導案の作成に先だって、授業を見ながら手順を記録するという経験をたくさん積むことが、実行可能性の高い指導案作成につながる。しかし、この作業は大変な時間と手間がかかり、授業時間内では1、2度できればよい方である。対面授業で示された例に従って、自分の力で手順を掘り起こす課題を課す予定である。

短大で教職を目指す学生にとっては、限られた授業コマ数の中で、教職科目の履修と語学力向上の努力との両立が大きな課題となる。教員免許の大前提となる英語の力を磨くことはおろそかにできない。このような状況において、授業時間外の活用を有効化する努力は必須である。今後は、同時期に実習中の仲間とリアルタイムで情報共有できるスペースとして Moodle を活用させ、Moodleの基本理念である学習コミュニティの構築と情報共有の働きをさらに有効活用したい。

CALL システムを利用したプロジェクト学習

PC@LL Ver4.0 ソフトレコーダが学習支援する「テーマ作成」から「評価」まで

小林 順子(聖徳大学附属聖徳中学・高等学校)

本校では 2006 年度より CALL システムを導入している。今回はこのシステムを利用して、それぞれの課題に取り組み、ひとつの「プレゼンテーション」を完成させるまでの手順を報告していきたい。

1. 実施科目・教室環境

- <実施科目> 異文化理解(高1、2選択)2単位
- <実施教室> CALL 教室
- <使用システム> PC@LL Ver4.0(内田洋行) ソフトレコーダ ドリルスタディ
- <Project テーマ> 「好きな世界の料理とその国及び文化的背景を説明してみよう！」

2. プロジェクト学習計画 - 内は CALL システム機能の導入、PC・視聴覚機器の利用を表す -

Project 1 ビデオによるモデルスピーチ視聴

ビデオ再生機能(教室備品)

- *これから行うプレゼンテーションのモデルとして TDK コア「アクティブスピーチ」に掲載されている『Research & Report』を視聴し、スピーチ構成及びプレゼンテーションがどのようなものであるかのイメージを与える。(「モデル文」及び「使える表現」をハンドアウトにして配付する。)

Project 2 テーマ決定及びリサーチ

インターネット検索機能

- *自分の好きな料理を選び、その背景をインターネット検索で調べる。資料として英語版のウェブサイトにアクセスすると、原稿に取り入れやすくなることをアドバイスする。

Project 3 原稿作成

Microsoft PowerPoint / Microsoft Word ツール 文章校正機能など

- (1) ハンドアウトに基づき、フローチャートを書く。
- (2) 集めた資料などを PowerPoint (あるいは Word 画面) でプレゼンテーション用に編集する。
- (3) Project 1 のモデル文をひな型にして、英文を書く。
- (4) 生徒はスペルチェックを Microsoft Word 文章校正を用いて行い、教員が文法チェックを行う。

Project 4 音読練習・音声提出・持ち帰り

PC@LL ソフトレコーダ ドリルスタディ WRITING / SPEAKING

- (1) PC@LL WRITING のチャット機能「音声読み上げ」により、個々の語の発音を確認する。
- (2) PC@LL SPEAKING の音声録音ボタンをクリックし、自分の音声を吹き込みその波形表示を表示し、納得がいくまで練習する。
- (3) 音声提出ボタンをクリックし、自分の音声を CD に保存して家庭へ持ち帰る。
- (4) 家庭で CD を聞いてもらい、「評価用紙」の『保護者からの感想』の欄に記入してもらう。

Project 5 プレゼンテーション

Microsoft PowerPoint / プロジェクター / ビデオ録画・再生機能

- (1) PowerPoint (あるいは Word 画面) をプロジェクターで映し出し、プレゼンテーションを行う。
- (2) 聞き手を意識して話し方の工夫をする。声の調子やリズム及びプロジェクターの画面を有効に使いながら、自分の伝えたいことを効果的に表現する。
- (3) ビデオでプレゼンテーションの様子を録画する。
- (4) 録画 DVD を再生し、自分の発表を視聴する。用紙に 準備に費やした時間、特に頑張ったところ、感想などを書き込み、自己評価する。

Input は CALL で、Output は「人」対「人」をコンセプトに授業を展開している。勤務校の CALL システムについては Web Magazine 「聖徳スタイル vol.11」にて紹介しているので見ていただければ幸いです。

(http://www.seitoku.jp/ibaraki/news/web_magazine/call002.pdf)

高校における音読指導

単純な作業を敬遠する生徒たちとともに

田辺博史 (青山学院高等部)

最近、「音読」の効果が見直され、多くの教室現場で積極的に行なわれるようになってきている。しかし、その実践例の多くは中学校のものであり、高校での実践例は中学に比べてそれほど多くはない。これは、心の発達に伴い、生徒が音読のような単調な練習になかなか興味を示しにくくなることが一因と考えられる。本稿では、単純な作業を敬遠する生徒たちの多い高校の現場において、失敗を繰り返しながらも、ある程度成功を収めた(又は収めている)方法を紹介したいと思う。

* 音読のための準備

- 1 まずは、英文の理解を十分に行なう。音読は、内容理解の活動(リスニングを含む)を十分に行なった後で行なうことが効果的であると考えられている。
- 2 「音読」の目的である、(1)文字と発音の結びつきの強化、(2)音韻符号化の高速化、(3)表現の内在化、などを生徒に説明する。その目的が、きちんとわかると生徒はその活動に意味を見出して、取り組んでくれるようになる。これらを行なった後で次のような活動を行なう。

* 音読の実践例(これを1時間ですべて行なうことは時間の関係上難しいので、実情に合わせてながら、選択、編集して行なっている。)

- 1 コーラスリーディング(全体で音読)
- 2 Buzz Reading(生徒を起立させ、2回読ませる。読んだら着席)
- 3 思いやり音読(ペアを背中合わせに座らせ、一文ずつ交互に音読していく。相手に聞こえるように思いやりを持って読まなければならない。)
- 4 チェイス・リーディング(片方のペアが1文を音読したら、もう一人が追いかけるように音読を始める。相手に追いつかれないよう、または相手に追いつけるように読む。)
- 5 シンクロ(パラレル)・リーディング(テープを聴きながら、文字を見て音読)
- 6 音読カード:ペアで音読を行い、パートナーの音読を聞いて、評価を行い、音読カードに記入しサインをする。音読を行なう際には、それぞれ、今回はrの音に注意、thの音に注意、または、eye-contactをとりながら、など、評価のポイントを決めて、行なわせる。
- 7 全体で Read and Look up
- 8 シャドーイング(全体でテープを聴きながら)
- 9 ペアでシャドーイング
- 10 ペアで keyword reproduction(黒板にキーワードのみを書いておき、それを見ながら生徒は英文を再構築(reproduce)する。教科書そのままの英文でなくても良い。)

以上のような活動を行なっているが、これらは私の独自のアイデアではなく、いろいろな著作を参考にして、自分の高校にあったものを取捨選択し、アレンジをさせて使わせてもらっている。詳しくは、以下の著作を参考にして、それぞれの現場にあった活動を「調合」していただければ幸いである。

参考文献

- 『シャドーイングと音読の科学』門田修平 著 コスモピア
 『正攻法がいちばん シャドーイングを音読 英語トレーニング』門田修平 監修 著 コスモピア
 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』土屋澄男 著 研究社
 『楽しい英語授業 Vol.13 変化のある繰り返して学び力アップ』明治図書
 『楽しい英語授業 Vol.3 音読の力を育てる指導』明治図書

音声映像研究研修部会

佐藤 努 (明治学院大学)

2007年度最初の研修会(通算7回目)を7月7日(土)拓殖大学(文京キャンパス)C館4階CALL教室にて行ないました。今回は「語学ブレンディッド・ラーニングと新しいE-learningソフト」をテーマに、以下の3人の講師による3部構成で行ないました。まず、江原素有氏(早稲田大学OSS研究所 客員研究員)からは、基調テーマに沿って語学のブレンディッド・ラーニング環境構築に最適な新しいオープンソースe-Learningソフトウエア「Japrico」(ジャプリコ)の紹介、および教室での授業と併せて、様々な教育メディアを組み合わせたネットワーク学習環境を提供するモバイル型語学教育についてのお話がありました。続いて、佐久間晃一氏(東通産業株式会社)よりiPodを中心としたポッドキャストイングのお話を通して、教育現場や商用利用の実例紹介、どのようにモバイル機器を利用するのか、またコンテンツを製作・配信まで、どのようにするのかについて、詳しい解説がありました。最後に、青戸公悦氏(株式会社EVC SI事業本部)から「デジタル著作権管理の最新状況について」と題するお話があり、DRM(デジタルライツマネジメント)の最新技術状況の紹介とともに、デジタルライツ(デジタル著作権)の管理上での問題点や、注意すべき点などの指摘がありました。会場は20名程を収容できるCALL教室でしたがほぼ満席となり、質疑応答も活発に行なわれました。合同開催を快く受け入れて下さった教材教授法研究研修部会の久保田章先生(筑波大学)、会場を入念に準備し提供いただいた佐藤明彦先生(拓殖大学)ならびに広報にあたりご協力いただいた事務局の下山幸成先生に御礼申し上げます。

早期外国語教育研究研修部会

久埜 百合 (中部学院大学)

長いこと議論されてきた小学校教育課程への英語教育導入は、そろそろ決着が付きそうな気配がある。去る8月末に文部科学省から公にされた「素案」では、2011年度には高学年において教科としてではないが必修として授業時間を確保するとし、その準備としてこの秋から地域の指導的な立場にある教員・指導主事を集めて研修を行い、その参加者は地域に戻って伝達研修を開くことができるようにする目処が立った。更に2009年には「英語ノート」を配布し、指導に際してはDVDを作成し指導方法を徹底しようとしている。

それらの予算措置もとられ、今までのように子どもたちに英語と出合わせる授業を地域の裁量に任せる、という状況ではなくなって来ている。しかし、現場の教員たちは、まだ指導力に不安を感じており、必要な指導力の向上のために自力で努力しようとしている。英語活動等国際理解活動は、英語学力の向上を直接志向するものではない、としているが、子どもたちの英語に触れて慣れ親しもうとする動機の高さと習熟の様子を目にしている教員の間では、現状の英語活動の指導目標を明確にして、系統性のあるカリキュラムのもとで確かな授業をしたい、と願っている。

当部会では、この解決策として、年間授業時間の3分の1くらいしか補充されていないALTや日本人外国語講師に依存するのではなく、学級担任が自信を持って英語を教えることの出来る教材を開発することが必要であると考え、教材研究を始めている。学級担任が英語を使って授業をすることを容易にするために、昨年度から電子ボードの可能性を探ってきた。実際に電子ボードを使った授業の実験を続け、ある程度の手ごたえを感じている。

今後、広く公開の研究会や学会で発表し、多くの意見を徴して教材として役立てられるように改善を続けていくつもりである。

教材教授法研究研修部会

久保田 章 (筑波大学)

当部会では、「使える」英語力の養成を目指して、近い将来にメディアを利用した教材の作成を行いたいと考えており、会員はそれぞれ、授業における映画などのメディアの効果的な活用方法や、教材の言語テキストの語彙や文法、課題の分析など、様々の理論的、実践的な観点から教材開発のための基礎研究を行ってきました。

今年度は初心に帰り、教材開発のオーソリティーやパイオニアの方々から、教材開発の理念や背景、作成上のご苦労など、いわば教材だけを目にしていたのではなかなか得ることのできない貴重な情報をご披露いただく機会を設け、教材開発の何たるかを勉強したいと考えてきました。

その一環として、上半期は7月に第1回研修会を行い、駒沢女子大学の太田洋先生に「教室で行っていたことを教材作りに生かす」というテーマでご講演をお願いしました。教材作成の基礎資料としてのコーパスをどのように開発し、利用してこられたのか、中学校と大学における指導をどのように生かしながら教材を作成してこられたのかなど、教材開発の過程を中心に、『NHK ラジオ レベルアップ英文法』)などの具体例を示しながらお話いただきました。参加者も20名を越え、教材開発の諸問題について活発な質疑応答がありました。

次 号 予 告

次号支部だより(41号)の発行は2008年3月の予定です。

内 容

英語教育への提言

第119回研究大会報告

授業実践報告

研究研修部会だより

その他よい企画やアイデアをお持ちの方は支部だより担当まで
情報をお寄せください。

秋たけなわ、校内外共に行事や研究会等で多忙な季節です。その中を支部だより 40 号発行に当たって原稿執筆、情報提供等にご尽力くださいました方々に心から感謝申し上げます。

秋といえば、時まさに読書の秋、10月28日の読売新聞に「1か月本を読まず、5割」という見出しで、「読書」に関する全国世論調査の結果が出ていました。一体「読書の秋」は何処へ・・・といった気持ちになりますが、その紙面には、「本離れ」の原因の一つとして、手軽に情報収集ができるインターネットの普及が挙げられていました。確かに情報技術時代の到来で読書を取り巻く状況も変化していることは事実です。

最近、ふと目にした「パソコンを活用した楽しいコミュニケーションの授業」という本に「読書」に関する小学校の学習活動の実践例が載っていました。「読書紹介を楽しく」という内容の実践でした。紹介したい本の粗筋が、わかるように各場面をイラストにし、本のダイジェスト版をコンピュータで作成するのです。そして場面の説明や本の一部を音読してマイクを使ってコンピュータに録音し、全校生徒に画面を視聴してもらおうといった試みでした。画面から面白さが伝わってきて、読んで見たいという意欲も出て来るような読書紹介です。要は、「何事も使い方」です。コンピュータをより良く活用する「知恵」こそ、学校教育の場で学ぶべきだと思いました。

石丸 玲子 (ishi-mr@nifty.com)

私が初めて Microsoft Word のツールの機能を知ったとき、その機能のすばらしさに感動しました。今まで一語一句を指で数えていたのが、瞬時にカウント数が出てきます。またツールの文章校正にかければミススペルがチェックされて修正ボタンをクリックすれば直してくれます。今まであんなに時間をかけてやっていたことが瞬時にできることにより何か得をしたような気持ちになりました。「知らないことを知る」「できないことができるようになる」ことの一ひとつとしてメディアの発達があります。それは私たちに「感動や喜び」を与えてくれます。

LETで得た知識などを生かして、生徒たちにも「わぁー！」と歓声がわくような授業を展開していきたいと思っています。

小林 順子 (kobajun@tkc.att.ne.jp)

www